

令和4年度(2022年度)

浦和明の星女子中学校入学試験問題
(第一回)

国語

(50分)

注 意

1. 試験の開始まで問題用紙を開かないこと。
2. 問題用紙は全部で12ページある。試験開始と同時にページ数を確認すること。
3. 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書くこと。なお、解答用紙の※印欄のところは記入しないこと。
4. 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書くこと。
5. 印刷のはっきりしないところがある場合は、手をあげて係の先生にきくこと。
6. 字数制限のある場合は、句読点も一字と数えて答えること。

受験番号

--

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「一」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

外見とはどのようなことを意味するのでしょうか。字義通り考えれば、「外」から見える人の姿ということでしょうか。「外見を気にする」とは、まさに見た目で判断される自分の姿、自分への評価に敏感になるということです。誰がどのように考えようとするかは自分だとも言えますが、そう簡単なことでもなく、私たちは常に「他者からの視線」に対抗する「術」を考え、実践しているのです。そして私たちが日常の差別や排除を考へるとき、外見という問題もまた重要な手がかりです。本章では、外見をめぐる、語ってみたいと思います。

ゼミの男子学生が髪をテーマに卒業論文を書きました。内容は日本や西洋における髪を社会史をまとめたものですが、彼にとって卒論は自分の髪への「鎮魂（魂をささめる）歌」でした。彼は、ゼミにはよく手入れされた黒々とした髪を蓄えて現れました。ゼミだけでなく大学の日常も髪を蓄えた姿は特に違和感もなく、何の支障もなく彼は過ごしていました。しかし、大学を卒業し社会人になるタイミングで、彼は見事な髪に別れを告げなければならなかったのです。

【中略一】

日常生活世界を解説した社会学者A・シュッツによれば、私たちは普段「類型」に準拠して「よって」他者を理解し、「類型」は私たちがそれまで蓄積してきた「知識在庫」に依存しています。たとえば先の男子学生が卒業して社会に出ると「サラリーマン」となります。「サラリーマン」という「類型」は、アイロンが効いたしわのないワイシャツに興味のいいネクタイを締め、落ち着いた色のスーツを着て、にこやかにお客様に対応するといった実際の場面に即応した常識的知から構成され、そのほとんどが外見、見た目に関連したものだと言えます。より外見に徹底した「類型」といえば、「就活（就職活動）する大学生」を思い出します。個々の学生がどのような人間性を持ち、どのような思想をもっているのかなど、「内実」に一切関わりなく、就活スーツに身を固め、清潔な髪形に整えた瞬間、彼らは「就活する大学生」に変身してしまいます。

人間は外見や見かけではなく、その中身が大事だ、という考えを否定する人はまずいないでしょう。そうでありながら同時に私たちは普段、いちいち目の前にいる他者の「なかみ」や「ころろ」を気にして、生きているわけではありません。他者の「内実」ではなく、他者の「外見」をもとにして、その場その時に応じて、目の前の相手が何者であり、どのように対応すれば適切であるかを瞬時のうちに判断し、

線に移そうとすれば、そこでも別のスマホの画面が見えてしまいます。見たくもないものが、まさに「見えてしまう」のです。

でもなぜ私は困ってしまうのでしょうか。先に述べたようにスマホは使用している人にとって、満員電車という人間が充満した異様な空間で、自分の世界に閉じこもることができる有効な道具です。それは同時に他者に対して関心もないし関与もしないことを示す道具でもあります。イヤホンで音楽を聴き、スマホの画面に目を落としてゲームやLINEのやりとりで集中している姿。それは周囲の世界や外界に対して耳も目も遮断し、自分だけの世界に集中している姿を周囲に表示していることとなります。「表示する」と書いたのは、もちろんスマホに熱中するとしても、その人は完全に他の乗客や外界の音や様子を遮断しているのではなく、聞こうと思えば聞けるし、見ようと思えば見えるからであり、そうした外界との繋がりを意味しています。

さきほど電車内で人々が適切に「距離」を保つことが電車の秩序にとって重要だと述べましたが、満員電車のように「距離」すら保つことが困難な場合、私たちはどのようにして自分を守り、自分と他者との繋がりを維持しようとするのでしょうか。ゴフマンの発想を借りて、私はこう考えます。

私たちは、自分を守る「膜」とでもいえるものを持っています。それは状況によって堅牢な「殻」となるかもしれませんが、薄く、破れやすく、誰の目にも見えないう透明な「膜」です。そして満員電車のように人間が過剰に密集してしまうとき、当然「距離」の維持は難しく、さらに「膜」さえも互いに触れ合い、擦り合わせる「摩擦」ことで、破れてしまう危険に私たちはさらされます。そのような状態のなか、私たちは、② スマホなど使える「道具」を駆使して、互いの「膜」を破る危険を回避できるよう細心の注意を払っているのです。

私が困ってしまうのは、隣の他者の「膜」をなんとか破らないように注意を払い、その場でいろいろとあるまっても、「膜」の向こうにある他者の世界が「見えてしまう」からです。LINEのやりとりや個人で検索している情報やゲームの様子など、別に私は見たくありません。結果として隣の人が懸命に維持しようとしている「自分だけの世界」を「侵犯」してしまう危うさを感じるからなのです。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないこと。これこそ、私たちが日常しつかりと守っている最大の「儀礼」と言えるでしょう。そしてこの儀礼を行使することに外見が密接に関連しています。

自分の「膜」を守りつつ、他者の「膜」つまり、他者の私的世界を侵犯しないと

実践しているのです。だからこそ、外見を考えることは、日常における他者との出会いや他者理解を考えるうえで、とても重要な営みだと言えるでしょう。①「たかが外見、されど外見」なのです。

「されど外見」を考えると、私たちは普段、他者とのように向きあっているのかをじつくりと見つめる必要があります。そしてこれは、ゴフマンという「風変わった社会学者が生涯テーマとした「共在」他者とともに在ること」を考え、そのありようを解説する営みと密接に関連しています。ゴフマンは、人間が他者と共にいる営みや複数の人間からできる集まりには、それ自体固有の秩序がつくられ維持されているという事実を明らかにしています。「相互行為秩序（the interaction order）」というものです。

X「私たちは電車に乗っている時に、どのような秩序を維持しながら過ごしているのでしょうか。私がまず思いつくのは「他者はじつとみつめない」というルールです。どんなに目の前の座席に座っている人が魅力的であろうと私はその人をじつと見つめたりはしません。でもやはり気になる時は、その人だけを「チェック」するのでなく、他の光景も眺めているふりをしながら、それとなく見るでしょう。ゴフマンの言葉を借りれば、それは「焦点をあわせない（unfocused）」見方であり、こうした秩序が維持されているのは「焦点をあかせない人々の集まり」であり、電車のような公共的な空間で「テンケイ的にみられる現象です」。

Y「私に限らず乗

り合わせた多くの人は、電車の中では、特定の誰かに焦点をあわせないで、焦点を

ぼかしながら、周囲の乗客の姿や様子を見るときとなく見ているのです。

さらに言えば私たちは、他の乗客との「距離」を絶妙に保ちながら、自分の場所を維持しつつスマホに熱中したり音楽を聴いたり本を読んだりしています。ゴフマンに言わせれば、新聞や週刊誌や本は、他者との「距離」をとり、「距離」を保っていること、言い換えれば自分は他者に対して関心はないし、他者という存在へ関与するつもりもないことを周囲の他者に表示するための「道具」なのです。もちろん今はスマホこそ最適な「道具」です。

ただこうした視線の取り方や「道具」が通常に機能して電車内の秩序が維持されるときでも、それが危うくなる状況はいくらでも起こります。

満員電車に乗って、私はいつも気になり、どうしようか困ってしまうことがあります。それは隣に立っている人や席に座っている人が熱中するスマホの画面が「見えてしまう」ことです。見たくなければ目を閉じればいいのですが、満員で身動きもままならないとき、目を閉じ続けると不安定な状態になるし、さりとて他に視

いう儀礼は、さらに私たちがその場そのときに応じて適切に自分の「外見」を整えることで達成されます。

たとえば私は、電車で空いている席を見つけると、座る前に必ず「すみません」と両側に座っている人に声をかけるか片手を少し前に出して「これから私がここに座りますよ」という意思表示をします。両側の人のコートや上着の裾を尻で踏まないように気をつけながら座り、リュックは両腕で覆うようにして抱え、膝の上でしっかりと安定させます。ここまですれば、自分の「膜」はしっかりと守れるし、両側の人の「膜」にも触れないし、私の世界にも「侵犯」する危険性はなく、ほぼ完璧な「乗客としての外見」を私はつくりあげることができます。そしてこうした外見をつくりあげた後で、今日の講義で使えそうな面白いネタはないかと、どこに焦点をあわせることもなく、乗客の様子を細かく観察しています。

④ 状況に応じて必要だとされる外見を整えること。この営みは、ほとんど誰もが逃れえないものと言えるでしょう。でもなぜそのような営みを私たちはしてしまうのでしょうか。これもゴフマンから得た私の知識ですが、私たちは常に自分の姿をめぐりその場その時の状況に適合するように印象操作しています。それはただ姿かたちという外形的なことだけではありません。自分自身がどのような存在であるかを相手にわからせようとする自分の中身にまで関わっていく印象操作という営みです。

【中略二】

外見で他者を判断し、また外見で自分自身を判断してもらうことは日常では必要な営みです。だからこそ外見を整え、その場その時に応じて印象操作し、自己呈示することは生きていくうえでの基本です。同時に、外見から「適切に」他者を判断し、他者に感応することは、とても重要であり、日常生活していくうえで回避し得ない営みなのです。

しかし他者をかけがえのない存在として敬意を払うことなく、外見だけから「恣意的に（勝手に）」判断し「決めつけ」、見下し、遠ざけるという差別や排除もまた、日常頻繁に起こっている事実でもあります。

外見による「決めつけ」を崩していくためには、どうすればいいのでしょうか。「ぼっちゃり」女性の意識改革、生き方改革を実践する「ラ・ファーフ」(雑誌名)の戦術や戦略は参考になると思います。また厳しい告発ではなく、私たちを少しずつ巻き込んでいく「マイフェイイス・マイスタイル」(団体名)の活動もまた、実はラディカル(根本的)な営みであり、私たちが「普通」に呪縛され「しぼりつけられ」ている事実を鋭く突きつけてくれます。

どちらからも学ぶべき共通点があります。それは「普通」の呪縛から自分自身を

解き放つプロセスがもつ意味を自らの腑に落とすことです。

「普通」の呪縛から自分自身を解き放つこと。それは私たちが「普通」からまったく離れてしまうことではありません。「普通」とはいわば空気のようなものであり、私たちはそれこそ命を終える瞬間まで付き合わざるを得ないのです。

それは、もろもろの因習や伝統、習慣といった「慣性」から「普通」を切り離し、新鮮な視点で「普通」を丁寧に見直していく作業ともいえるでしょう。そして見直す過程で私自身の他者理解やものの見方を制限したり妨けている知を見つけ、それを自分にとってより有効な知へと変貌させることが大切なのです。言い換えれば、人間の「ちがいをめぐる偏狭で硬直した図式を崩し、より緩やかでそれぞれを対立させたり排除させたりしないような形で「ちがいを認める新たな価値や図式を徐々にでも創造していく営みといえるでしょう。

(好井裕明 著「他者を感じる社会学 差別から考える」より)

問1 太線部a「チュウシ」・b「テンケイ」を漢字に直しなさい。

問2 次は、傍線部①「たかが外見、されど外見」と言える理由について説明した文です。空欄に入る最も適切な表現を、Ⅰ・Ⅲについては傍線部①以前の本文中から指定の字数で抜き出し、Ⅱについては後の選択肢から選び、それぞれ答えなさい。

外見ではなく中身が大事だと言われることが多いが、私たちは蓄積してきた「知識在庫」、つまり「Ⅰ(漢字四字)」をもとにして、人々を外見から「Ⅱ」化し、他者の「Ⅲ(漢字三字)」までも推測しようとする現実があるからである。

〔選択肢〕

A ルール B データ C トータル D パターン

問3 空欄X・Yに入る適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A もし イ つまり ウ しかし エ たとえば

問6 傍線部④「状況に応じて必要だとされる外見を整えること」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 次は、傍線部④について説明した文です。空欄に入る最も適切な語を2ページの本文中から四字で抜き出し、答えなさい。

その場の状況に合わせて「外見を整えること」とは、見せたい自己を呈示すること、つまり□をするという営みである。

(2) 傍線部の例としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

A 小児科の看護師が、威圧感を与えないように淡く優しい色あいの服を着て子どもに接する。

I サッカー観戦をする時、応援するチームのユニフォームを着て周囲の一体感を出す。

U 友達の誕生パーティーで自分の苦手な料理が出てきたが、おいしそうに全部食べた。

E いつもはお手伝いをしないが、親戚が集まった時には自分から進んで食器の片づけをした。

O 健康診断の前日に夕飯の量をいつもよりも少なくして、体重測定で数値を下げた。

問7 傍線部⑤「人間の『ちがいをめぐる偏狭で硬直した図式』を端的に述べた表現を(中略2)以降の本文中から七字で抜き出し、答えなさい。(記号も一字と数えます。)

問4 傍線部②中の「回避」を具体的に説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A スマホに集中することで、満員電車の中でも自分だけの心理的空間を作り出し、それと同時に自分が周囲の人に関与するつもりがないことを示すということ。

I スマホの便利な機能を使いこなすことで、満員電車の中でも自分の個人情報を周囲から守り、同時に他人の情報をうっかり見してしまう事態も避けるということ。

U 満員電車の中でスマホを手にはしていることで、危険を感じるような時があっても、すぐに誰かに助けを求められる状態にあることを周囲にアピールするということ。

E 満員電車の中でスマホだけを見ることが、他人からの視線を浴びる緊張から逃れ、また他人と目を合わせないことで相手に対しても気まずい思いをさせないということ。

問5 傍線部③「儀礼」について、次の各問いに答えなさい。

(1) ここでの「儀礼」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A ポイント B エチケット
C プライベート D セキュリティー

(2) ここでの「儀礼」の例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 友人の部屋へ遊びに行った時に、長い間貸したままになっていた漫画本を見つけたが、特に返却を求めなかった。

I 図書館での自習中、隣の座席に自分の荷物を置いていたが、席が埋まってきたので邪魔にならないように荷物をよけた。

U 買い物中、他人のカゴの中に欲しかった商品を見つけたので、その人に売り場をたずね、礼を言いつて自分も同じ物を購入した。

E バスに乗り合わせた人のおしゃべりがうるさかったため、その声が聞こえないようにイヤホンをはめて大音量で音楽を聴いた。

問8 (中略2)以降の本文において、筆者は「普通」をどのようにとらえていますか。適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

A 「普通」とは、「慣性」により人々が作り出したものにすぎないため、一切信頼せずに自分の持つ持っている価値観を貫くことが大事である。

I 私たちの多くは「普通」にとらわれているが、努力によってそのとらわれから切り離され、自由で偏りのない人間になることができる。

U 「普通」を見直したとしてもそれは次なる「普通」を生み出すことにはなるが、見直す行為は差別を減らす上でも決して無駄な営みではない。

E 「普通」は空気のようなものであり、それに抗うことはできないため、「普通」から離れようとせず、うまく付き合っていくことが現実的である。

O マスメディアによって画一的に作り出された「普通」に私たちは影響される傾向があるため、できるだけマスメディアに触れないことが望ましい。

二 次の文章は、秋ひのこ作「はしのないせかい」の一節です。本文を読み、後の問いに答えなさい。「」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

高校一年生の「樋口透風」は、小さな集落の地主の一人息子である。住んでいる集落では力仕事ができ、こそ男として一人前という考えが根強く、非力な透風は肩身の狭い思いをしていた。そんな中、曾祖母で、今年九十八歳になる「大ばあちゃん」だけは幼少期から透風の味方であり、「世界には『端』がない」という考え方も与えてくれた。最近では体力や認知機能にも衰えが見られるが、透風にとって大ばあちゃんはかけがえのない存在であった。もう一人、透風にとって大切な存在として、インターネット上で活動中の「タイラ」がいた。次は、タイラとの三年前の出会いを思い返している場面である。

何だコイツ。明らかに加工して、いいのに、やたら綺麗な顔立ち。女子か男子かわざと混乱させるような風貌。自分の写真をこんなにもひけらかしている時点で引く。絵が上手いのはいいとして、中学生でTシャツを作って、売り上げを寄付？プロフィールには「タイラ 中3」とあり、日本とアメリカの国旗の絵文字が並ぶ。妙に気になり、毎日検索して見ていたが、フォロワー機能を使う後押しとなった投稿は、夏休み最後の写真。透風が大ばあちゃんにもらったものと同じような、大人の頭ほど大きい地球儀に、タイラがびたりと白い頬を寄せている。

「セカイには、端がない。まるいものって、はしがない」

稲妻に打たれるような感覚、というのとは、なまじ比喩ではないらしい。実際、背筋がびつと伸びた。背骨がカタカタとまっすぐに整い、肋骨が開く。その隙間が、昂ぶる感情で満たされていく。誰もいない納屋の屋根裏で、花柄の椅子に座りなおす。汗ばんだ両の掌で小鳥を抱くようにスマホを包み、黒檀の瞳の少年をまじまじと見つめる。

その瞬間から、透風は彼のことを「コイツ」と呼ぶことを止めた。彼の名は、タイラ。まるいものにはしがないことを知る存在。

ちょうど、タイラが有名になり始めていた時期だった。ハーフは珍しくはないが、濃い栗色の髪と黒に近い瞳、高過ぎない鼻は日本人に親しみやすい。それでいて一般人とは一線を画する甘く整った見目が、まず母親世代の女性に受けた。そして、日本の中学生とは思えない絵や音楽の才能と言葉の選び方は、中高生の憧れとなった。ジェンダーレス男子、という肩書きがついてインスタアイドルとしての地位が完全に確立したのは、透風がタイラと出会って一年経った頃だ。

大切な感覚が、自分を通じてさつきに伝わったのだとしたら、それはすごく。大切な感覚が、自分を通じてさつきに伝わったのだとしたら、それはすごく。す

ごく

それはすごく。す

そうして迎えた今年のクリスマスは、人生で一番楽しいクリスマスだった。三十万人のフォロワーを持つタイラのインスタグラムライブ配信。タイラが自ら作詞作曲した新曲をギター一本で弾き語る。少しお喋りをして、今度はクリスマス定番ソングのカバー。最後にフォロワーへ丁寧なお礼を述べ、四十分ほどで終了した。

感動しました！新曲リプレイ待ってます！といった感想が続々と上がる。それらをじつと目で追っていると、さつきの声が出た。

「短かったね。でもタイラのトークって珍しいし、よかったね」

百貨で買ったというサンタのトンがり帽子を脱いださつきの表情は、晴れ晴れとしていた。その生身の人間の温度が波紋となり、透風の深い部分を刺激する。透風は自分もこの時間が本当に楽しかったのだと、やわらかい水が土に染み渡るように、喜びが静かに胸に広がっていくのを感じた。その喜びが、「いいね！」にすら安易に変換できない、心の奥底に閉じ込めている気持ちをそと外に引き出す。

「新曲、すごく、感動しました。タイラが、フォロワーのことを大事に思っていることをかけてくれるのも、ほんと嬉しくて、泣きそうになりました。タイラファンで、よかった」

言ったそばから、本当に目に涙が溜まり、慌てて手の甲で擦る。皮膚に、さらさらした白いものが貼りつく。さつきに施されたアイシッドウだ。

さつきは涙には触れずクッションに座りなおし、よくわからない動物の抱き枕をぎゅっと上半身で押し潰すように抱きしめた。

「顔もやっつても日本人離れしてるのに、礼儀とかそういうの、すごく日本人だよ。ユーチューバーと違って変なテンションもないし、逆にダレた感じもない。女子のサンタコスするかと思ってたけど、まさかの普段着だったしね」

そう、黒のニットにジーンズという出で立ちには驚いた。サンタの帽子だけはかぶっていたが。

「でも皆がこういう格好で騒いでる中、ひとりカジュアルで爽やかで、それもまたいいなって、思いました」

透風が言うと、さつきは「だよー」と笑った。それにまた、ほっとする。こうして誰かと気持ちに共有する感覚は、意を決して押し出した小舟が、温かい波にやさしく押し戻されたようで、温もりのある余韻が残った。

境界線、はタイラにとつてのキーワードで、タイラは「端」や「区別」を好まない。だから、女子の服がいいと思つたら迷わず着る。女子っぽい持ち物も使う。逆に男子っぽい格好をする日もある。自分の価値観で、世間が分けている物事を行ったり来たり。誰でもできるようでいて、現実にはそこまで割り切れない自由が、タイラにはある。

セカイはまるい。まるいものには、はしがない。

タイラが、大ばあちゃんの言葉を行動で示してくれる。身体中に沁み渡る、甘い親近感。だが、友だちになりたいとか、そんなことは思わない。この美しい人は、自分なんかとつながってよい存在ではない。だから、コメントの投稿はおろか、「いいね！」すら押さない。

② タイラは、画面のこちら側からそと覗き見ることができれば、それでいい。

へ 中略 1 その後、タイラの影響で始めた女装が集落の皆にばれてしまい、透風は父の「誠」に激怒される。そんな中でも大ばあちゃんだけはありのままを受け入れてくれた。また、最近集落に引越してきた同い年の義理のいとこである「さつき」は、なぜか透風が女装している屋根裏に頻りに出入りし、女装に協力してくれていた。次は、協力的である理由を尋ねた透風に對して、さつきが答えている場面である。

「女装とか、明らかに変だけど。キモいっちゃあキモいけどさ。透風が言ったんじゃ。本当の自分にしがみついて生きてるって。タイラがそういうのがいいって言うから、そうするんだって」

以前、そんなことを話した気もする。変じゃない、とはつきり言つた覚えはないが、さつきはそうのように解釈したらしい。

「これでも勉強中の、私」

さつきは、腰を折って床に散らばる服を拾い始めた。着せ替えごっこは透風だけ。さつきは普段着のままだ。

「自分の価値観で、いいと思うものとか、好きなことを自由にやっちゃうタイラと透風から、生き方ってやつを日々学ぼうとしてんの」

服を腕に抱え、深い光を宿す大きな瞳が、再び透風と向き合った。

「皆があんたたちみたいに常識の境界線をちよつとゆるめたら、生きやすくなりそうじゃん。だから、協力してあげる」

境界線。そうなのだ、と透風は心で強くなずく。まさに、水の中にいるようなそういう行きつ戻りつの自由が、いいと思うのだ。タイラからもらったその大切な

髪を伸ばし始めたのも、女装を始めたのも、タイラのようになりたいとか、女になりたいとかいう、こころざしがあつたわけではない。

何となく、女装をすれば「男らしさ」を真つ向から否定できるようで心が晴れるし、髪は伸びれば伸びるほど、女装に合うと思つた。さつきには本当の自分にしがみついている、なんて言つたが、内実は、現実逃避と紙一重の意地。男らしくない自分をどうにもできないだけだ。

へ 中略 2 大みそかの夜、数年ぶりに奥宮で初日の出を見たいという大ばあちゃんを連れて、透風はさつきと山の上にある奥宮に向かった。今後、このような機会があるとは限らない、との思いからであった。しかし、途中で足元がおぼつかなくなった大ばあちゃんは「負ぶつてくれるか」と透風に頼んだ。戸惑いながら背負おうとした透風だったが、大ばあちゃんを支えきれず、体勢を崩してしまう。

ああ、という声がそれぞれの口から漏れ、大ばあちゃんがずり落ちると同時に透風も横座りにくずおれる。

この華奢な身体が忌々しい。それ以上に、解放されてほつとしている自分が心から情けなかった。目と鼻の奥が燃えるように痛み、袖口で力任せに拭く。その横でさつきが冷静に大ばあちゃんを起こし、丸太の縁に座らせると、自分もその前で両膝をついてまっすぐ言葉をかけた。

「大ばあちゃん、ねえ、どっちが大事？ 三人で初日の出を一緒に見ることか、奥宮に辿りつくことか。奥宮に行くことなら、今は一旦帰って、夜が明けてから他の人にも手伝ってもらおう」

大ばあちゃんの願いは、叶わない。父だったら、難なく背負えるのに。堪え切れず、透風は無言でぼろぼろと熱い涙をこぼした。

「夜が明けてから。初日の出やのにそんなもん待ってたら意味あらへんがな」

大ばあちゃんが刺々しく抗議する。

「うん、でも私と透風じゃ大ばあちゃんを奥宮まで運べない。怪我させちゃうかもしない。今なら、家に戻れば三人で初日の出、見られるよ。間に合うよ」

論ず調子で語りかけると、さつきは立ち上がり、うながすように手を差し出した。「ほな、今すぐ人呼んでこい。お前らがようせんのやつたら、村の者呼んでこんか！」闇を震わせる大声で大ばあちゃんの機が飛び「しかりつける声して」、さつきの手が振り払われた。ばしん、と乾いた音が闇夜に響く。さつきの顔が凍りつき、透風の全身が粟立つ。

透風が知る大ばあちゃんは、気難しいところもあるが、やさしくて、透風には怒ったりしない。だから、こうなった以上「はなしやあないな」と言ってくれと、どこかで期待していた。

しかし、今、目の前で顔をくしゃくしゃにして憤りを顕にする大ばあちゃんは、思うように歩けない膝に業を煮やし、奥宮で初日の出を、という願いが叶わず怒っている。その思いを叶えてあげられない透風とさつきを、はっきりと責めている。

大ばあちゃんに初めて怒鳴られた衝撃で、何も考えられなくなった透風は、電池が切れたように冷たい地面に座ったまま動けない。さつきが、無言でスマホを取り出した。画面を確認し、かぶりを振る。電波もワイファイもない。

「とりあえず、私が神社に戻ってママを呼んでくる。それから……」

さつきが言いかけると、大ばあちゃんがそれを横から遮り怒声を浴びせた。

「あなたのオカンじゃあかん。誠一呼んでこい。とにかく早う何とかせえ！ 夜が明けてまうわ！」

引きつったさつきの顔に怯えが浮かび、傷ついた瞳が透風の胸を深くえぐる。

険しい表情で睨みつける大ばあちゃんから目を逸らすと、さつきは「弱々しく」「じゃあ、行ってくる。すぐ戻るから」と言い、来た道をひとりで引き返していった。

透風は嫌な味がする唾を飲み込む。今ので、さつきがもう屋根裏に來なくなったかどうかしよう。大ばあちゃんを嫌になつたら、どうしよう。

木々の奥にさつきの懐中電灯の光が見えなくなると、透風はのろのろと立ち上がり、手や太ももの土を払い落とした。頭上で幾重にも重なる枝の先を見上げる。夜空はまだ青暗い。さつきが境内にいる誰かを連れて戻ってくるのに、最低でも十五分。父を呼べば三十分以上かかるが、日の出にはなんとか間に合う。

「あれ、さあちゃんどこ行きよった」

ふいに、足下で声がした。大ばあちゃんがきよるきよるしている。透風は混乱した。声に、さつきまでの険がない。さつきがいなくなったことを、本当に疑問に思っているみたいだ。

「さつきは神社に人呼びに行った。誰か大人が来てくれたら、奥宮まで行ける。せやから寒いけど、もうちょっと待とうな」

丁寧と言ったつもりだが、何を今さら、とつい思ってしまう。すると、大ばあちゃんの顔から疑問がすつと消え、代わりに「おもちやに飽きた子供のような表情が浮かぶ。」

「ここに来るのは、これが最後かもしれない。透風、大ばあちゃんが行かれへんでも、いつかさあちゃんとタイちゃん「タイラのこと」には見せてやり。初日の出は奥の神さんから見るのが一番なんや」

行きたいのが行きたくないのかどつちや。

涙で濡れた頬が、ひりひりといつまでもしびれた。

へ 中略3 その後、自宅に帰った大ばあちゃんは「お天道さん出たら起こして」と言っで寝てしまつた。

「あの」相手が眠ってしまう前にと、透風はきこなく声をかける。

「うん？」さつきが疲れた顔を向ける。

「さつき、山で大ばあちゃんが言ったこと、すみ、すみません。手も、た、叩いて」

「何で透風が謝るの」

さつきは、雪が掌で溶けるように淡く微笑んだ。さつきが去った後、大ばあちゃんが急に態度を変えたことを説明する。

「僕も、ついていけないんですけど、一応言っておこうと思って。そもそも悪気は、なかったんだと、思います」

大ばあちゃんをかばうというより、さつきは何も悪くないのだと伝えたかった。うん、とさつきは応じ、背後を振り返る。雪見障子のガラスの奥で、布団にくるまった大ばあちゃんが、太いびきをかいている。

叩かれた手をもう一方の手で包み、正直、ちよつと怖かったけど、と前置きしてさつきは言った。

「それくらい行きたかつたんだらうね、奥宮に。理由を想像すると、やっぱり連れて行つてあげたかつたよね」

「理由、ですか」

「大ばあちゃん、焦ってたんじゃない？ いつまでもまた来年行けばいいやつて、言つてられないのかも。体力があつてもボケたらわかんなくなつちゃうし、頭がはつきりしても身体がついていかなかったら、奥宮には行けないじゃん。それに、こんなこと言つていいのかわかんないけど、もう九十八だし。逆に、ころつと諦めちゃつてほんとにいいのって感じだよ」

透風が日頃考えないようにしていることを、恐れず口にする。毅然としながら、それがより何かいい方法ないかなあ。大ばあちゃんを奥宮に連れて行く方法、とさ

「もうええわ。帰るか。寒いわ」

え。透風の両目がすつと見開く。今、何て？

ほれ、起こしてんか、と大ばあちゃんは透風に向かい、赤ん坊がそうするように両手を高く伸ばす。ふたりで抱き合うようにして立ち上がると、ほんと、大ばあちゃんが透風の腕に、泥のついた手で触れた。

「透風、お日いさんはな、どこにいてもお日いさんや。初日の出は、どこにいても初日の出や。さあちゃんと透風と一緒に見れたら、どこでもええわな。神さんも許してくれはる」

「でも大ばあちゃん、さつきが今、ひとりで山を下りて……」

「もうええ、もうええ。やめやめ。寒うて待つてられへん」

何やねん。何なんや。

子供の頃から聴こえていた大人たちの声が脳裏によみがえる。大ばあちゃんには困ったもんやわ。年いってねえ、言うてることが……。しゃあないわ、だつて九十やもん。昔から頑固やけど、振り回されるこつちの身にもなつてほしいわ。

年のせい。老いや余命を連想させる語句を口に始めた大ばあちゃんが、ほんの少しづつ、はじめてもはじめてもロボロボと落ちるバズルのピースみたいに、元の姿を保てなくなつていく。同じ言葉の繰り返し。つじつまが合わない会話。朝言つたことを昼には忘れていく。

これまでであえて知らん顔で受け流していた現実を、バケツに溜めて一気に浴びせられたようで、透風は激しく動揺した。

「帰るで。さあちゃんどこ行きよった」

年のせい。大ばあちゃんは、悪くない。そう思おうとすればするほど、内側で感情が膨らんでいく。

己の力不足に対する悔しさ。大ばあちゃんに初めて怒鳴られた衝撃。努力したのに役立たずだと宣言された哀しみ。ひとつひとつが胸を潰すほど痛みを伴う透風の気持ち。もうええわ、のひとりで、いとも簡単に流された気がした。それだけではない。さつきや綾音おばさん「さつきの母」の好意も含め、全てをなくしてもよかったことにされた、気がした。

大ばあちゃん、それならせめて、さつきにはあそこまで怒つてほしくなかった。

「奥の神さん、お聞きの通りや。どうぞ堪忍してください」

大ばあちゃんが胸の前で小さな手を合わせ、奥宮の方角に向かって頭を垂れた。

さつきを待たず、ふたりで山を下り始める。少しも進まないうちに、大ばあちゃんが再び足を止め、奥宮の方を振り返った。

つきが再びあくびをする。その上瞼がびた、びた、と下瞼にくつついては離れる。最後は、くつついたままもう開かなくなつてしまった。座つたまま、首がかくんと下がる。

ささくれ立つた心が、すうつと風いいていく。やわらかくなったそこへ、大ばあちゃんの言葉がすうりと戻ってきた。

いつかさあちゃんとタイちゃんには見せてやり。

ああそうか。大ばあちゃんが、奥宮に行きたがつた理由。

庭に目を向ける。山の向こう側が曙色に染まり始めていた。その光が、徐々にこちらに迫ってくる。この光を、大ばあちゃんは――。

奥宮で初日の出を A のではなく、 B のだ。

一秒ごとに闇が引いていく様子を、ずつと見ていたかつた。見えていなかったものの輪郭が、徐々に見えていく。

今年はじめの、ヒヨドリのおえすりが聞こえた。

窓から燦々と降り注ぐ光があまりにもまぶしく、目が覚めた。身を起すと手にしていたスマホがごとりと落ち、液晶画面にふつと時計が表示される。八時二十分。傍らで、さつきが猫のように身体を丸めて眠っている。起こさないよう息を殺し、背後の障子を細く開けた。薄間の座敷で布団はもぬけの殻で、庭から低く長く差し込む朝日を追って視線を部屋の奥まで移すと、廊下側の襖が開いており、大ばあちゃんが立っていた。

「透風、起きたんか。大ばあちゃんもな、寝過ぎしてもうたわ」

そう言つて縁側まで歩み寄り、よつこいしよと畳の端に横座りする。

「はあー、ええ天気や」

気持ちよさそうに目を浴びる大ばあちゃんの顔に、山での険しさはない。「よう寝てるわ」と口元をゆるめ、節くれ立つた指でさつきの頭にそつと触れた。

数時間前に山でさつきを怒鳴りつけたことは忘れていたのだろうか。そのことを、どう思っているのだろうか。聞いてみたい気もあるが、聞いても仕方がないのだろう。今は言葉通り受け取ることに決める。

「大ばあちゃん。僕、目標ができた」

「何や」

「何とかして、一日も早く大ばあちゃんを奥宮に連れて行く。歩きやすい階段とか、スロープとか。樋口はこの村ですつと色んなもんを拵えてきたんやから、僕も頭ひねつてどうにかする。あそこはやつぱり大ばあちゃんが行く場所やから」

僕らに奥宮の日の出を見せたいのなら、何があんでも一緒に来てもらう。床の一点を凝視し、うんうんと自分にうなづく。さつきが言った通りだ。ころつと諦めたら、駄目なのだ。

階段拾えるより、カラダ鍛えてオレを背負ったらええがな、などと言われるかと思つたが、大ばあちゃんは大口を開けて笑つた。かかか、といかにも愉快そうに歟を寄せて目をきゅつと閉じ、頬をひくつかせる。目元が涙で滲み始めたのは、感動したからではなく、多分ただの生理的な反応だろう。その涙を拭い、ひいひい言いながら大ばあちゃんは声を絞り出した。

「初笑いや。ええ初笑いやわ。今年はいえ年になりそうや」

「冗談やないで。本気や」

「当たり前や。それでこそ樋口の男や。困難を切り開くのが樋口なんや。そうやって村も家も大きゅうしてきたからな」

樋口の男。大ばあちゃんが透風に対して初めて口にしたことに、絶句する。大ばあちゃんだけは、その言葉を使わなかったのに。

カチ、と歯車が噛み合うかすかな感覚が胸に伝わる。背負えなくても、いい。別のやり方でも、いい。あれほど嫌で嫌でしょうがなかった、「樋口の男」。その硬い輪郭がふつとゆるんだように感じた。

「さあちゃんとタイちゃんにも手伝ってもらええ。皆で力を合わせてな」

大ばあちゃんが再び、さつきのこめかみをそつと撫でる。

「透風、ええお連れができたなあ。よかったなあ」

お連れ。友だち。一応義理のいとこだが、血がつながっていないせいが大ばあちゃんにとってはあまり関係ないらしい。

⑥ タイラと大ばあちゃん成り立つ心地よい狭きさかい。そこへさつきは、――さつきは壁に穴を開けて入ってきた。

内側から何かが押し開いてくる気がして、透風は思わず胸に拳を当てた。不思議な感覚だった。閉じ込めていた、というよりは閉じこもっていたものが自らの意思で顔を出すような。透風を守る境界線が、「友だち」の居場所を作るように、外へ外へと広がっていくような。

「ええお連れや」大ばあちゃんが繰り返す。

広がった分だけ、透風はおそろおそろ歩き出す。どこまで行けばはしがあるのかわからないうちに、ゆつくりと踏み出していく。

心の表面がくすぐったい。どんな顔をしてよいかわからず、顔中を両手でこししと力任せに擦る。朝の光をたつぷりと浴びた頬が、暖かい。

問4 傍線部③「それはすごく。すごく」に込められた透風の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア タイラの言葉に勇気をもたっていた透風だったが、自分が同じような行動をしても周囲には受け入れてもらえない中、初めて理解を示してくれたさつきに感謝の念を抱いている。

イ タイラの子ども離れた行動力に驚きを感じていた透風だったが、自分も知らず知らずのうちにタイラと同じ生き方をしているのだとさつきに気づかされ、その事実感激している。

ウ みんなにタイラの魅力を知ってほしいと思っていた透風だったが、さつきにタイラの良さを理解してもらえたことで、自分も微力ながら彼の役に立てたのだと誇らしく思っている。

エ 自分が共感するタイラの価値観を周りに受け入れてもらうのは難しいと感じていた透風であったが、自分の大事にしている思いをさつきと分かち合えた気がして、喜びをおぼえている。

問5 傍線部④「心の奥底に――引き出す」とありますが、「そつと外に引き出し」した「心の奥底に閉じ込めている気持ち」をたとえた表現を6ページの本文中から二字で抜き出し、答えなさい。

問6 傍線部⑤「おもちゃに飽きた子供のような表情が浮かぶ」とはどのような様子を表していますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 集中して取り組んでいたことへの興味を失い、急に別のことに熱中し始める様子。

イ 難しいことに挑戦してきたが限界を感じ、達成しやすいことを選ぶようになる様子。

ウ こだわっていた物事に對し、それまでの態度を一変させて何の未練もなくなくなる様子。

エ 大切にしてきた価値観が揺らぎ、どうしたら良いのかわからずに途方に暮れる様子。

指の隙間からさつきを見下ろすと、ようやくぼんやりと瞼を開けた目が、鳥が羽根を伸ばすように長い睫毛をゆつくりと動かし、瞬きをした。

問1 太線部a「画(する)」・b「障子」の読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「なまじ比喩ではない」はどのような表現に言いかえられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ぴつたりなたとえである

イ なまなましいたとえである

ウ 意外性のあるたとえである

エ 言いふるされたたとえである

問3 次は、傍線部②「タイラは、画面の――それでいい」と感じるに至った透風の思いの変化についてまとめた文章です。空欄に入る最も適切な語を、それぞれ指定の字数の漢字で答えなさい。ただし、1・4は自分で考え、2・3は5ページの本文中から抜き出すこと。

初めは、「コイツ」という呼び方に象徴されるように、透風はタイラの言動が気になりながらも、どこかで「1(二字)」心も抱いていた。だが、ある時、信頼する大ばあちゃんと似た価値観をタイラのメッセージから感じ取ると、一気に「2(三字)」を覚えるようになった。そして、世間が決めた枠組みを軽々と乗り越える、「3(二字)」そのもののタイラに、「4(二字)」の念をも抱くまでになった。

問7 次は、(中略2)から(中略3)までの「出来事」と「透風の心情・様子」を時間の流れにそって表にしたものです。表中の(Ⅰ)～(Ⅳ)に入る語の組み合わせとして最も適切なものを後のア～エから選び、記号で答えなさい。

出来事		透風の心情・様子
大ばあちゃんからおぶてくれるよう頼まれたが、背負えない。		(Ⅰ)
大ばあちゃんから初めてきつく当たられる。		(Ⅱ)
再度の説得と提案を試みたさつきが、大ばあちゃんに激しい怒りをぶつけられる様子を見る。		(Ⅲ)
大ばあちゃんから「家に帰ろう」と言われる。		(Ⅳ)
奥宮の方を振り返る大ばあちゃんの言葉を耳にする。		やりきれなさ

ア (Ⅰ) 無力感 ↓ (Ⅱ) 呆然 ↓ (Ⅲ) 不安 ↓ (Ⅳ) 困惑
イ (Ⅰ) 絶望感 ↓ (Ⅱ) 恐怖 ↓ (Ⅲ) 驚き ↓ (Ⅳ) 困惑
ウ (Ⅰ) 屈辱感 ↓ (Ⅱ) 呆然 ↓ (Ⅲ) 不安 ↓ (Ⅳ) 恐怖
エ (Ⅰ) 敗北感 ↓ (Ⅱ) 困惑 ↓ (Ⅲ) 驚き ↓ (Ⅳ) 呆然

問8 波線部ア～オから読み取れるさつきの人物像の説明として、当てはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「自分の価値観で、――日々学ぼうとしてんの」という発言からは、自分とは異なる考え方を受け入れようとする柔軟さが感じられる。

イ 「自分もその前で両膝をついてまっすぐ言葉をかけた」からは、相手の目線で物事をとらえ、誠実に他者と向き合おうとする姿勢が感じられる。

ウ 「無言でスマホを取り出した」からは、余計なことは言わず、傷ついた友人の気持ちを救うために黙って寄り添う優しさがうかがえる。

エ 「弱々しく――引き返していった」からは、自分に今できることを精一杯行い、果たすべきことから逃げない責任感がうかがえる。

オ 「雪が掌で――淡く微笑んだ」からは、予想外の出来事であった後でも、人々を思いやることを忘れない寛容な人柄であることがうかがえる。

問9 空欄A・Bに入る最も適切な表現を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 見たかった イ 見せたかった
ウ 見なかった エ 見られなかった

問10 次は、傍線部⑥中の「せかい」について説明した文章です。空欄に入る最も適切な表現を9ページの本文中から抜き出し、それぞれ指定の字数で答えなさい。

「ア（四字）」という言葉を知ると、いわゆる「男らしさ」をイメージし自分に引け目を感じていた透風にとって、「タイラと大ばあちゃん」という理解者に守られて過ごす世界は「心地よ」くも「狭き」ものであった。だが、さつきの言葉によって「イ（三字）」がゆるみ、世界が広がっていくような感覚をおぼえる。そのような変化を透風自身は照れくささと喜びを持って受け入れていることが、「ウ（六字）」という語から読み取れる。

Bさん

□の文章で述べられているように、見た目から生まれる先入観は危険だと思いました。私自身、昔から母に「人に対して偏見を持つたり、【ウ（二字）】メガネで相手を見たりしないよう気をつけなさい。誰かを【エ（二字）】することに心がかるから。」と言われてきたことを改めて思い出しました。□の文章からも、それと重なるメッセージを受け取りました。

Cさん

私自身、自分と考え方や見た目が異なる人と出会った時、明らかな決めつけや偏見を持たないように気を付けて過ごしていたつもりでした。そんな時に「資料」を目にし、多様性を認めるために大切なのは、そもそも「Y」にある、他者や自分自身に対する考え方がどうであるか」なのだと思ひ、はっとしました。そう考えると□の文章は、透風が他者との関わりにおいて成長した物語であると同時に、透風が「オ」【物語であると思ひました】

問1 空欄ア～エに入る適切な語を考え、指定の字数の漢字で答えなさい。

問2 空欄Xに入る人物名を□の本文中から抜き出し、答えなさい。

問3 空欄Yに入る適切な表現を「資料」の中から四字で抜き出し、答えなさい。

問4 空欄オに入る適切な表現を考え、十五～二十字で答えなさい。

三 次は□、□の本文と「資料」（鷲田清一「折々のことば」朝日新聞2021年7月13日朝刊）を読んだ中学一年生の三人が書いた感想文です。これを読み、後の問いに答えなさい。

「資料」

多様性って、やっぱり覚悟いりますよ。

上田 假奈代

鷲田 清一 2083

折々のことば

大阪・釜ヶ崎で「こえとことばとこころの部屋」を主宰する詩人は、多様性は「自分にとって居心地のいい人だけと一緒にいること」とは違うと言う。むしろ「招かざるお客さん」とどう「出会い直して」いくかが問題だと。であれば、時にその筆頭が自分であることも？ 認めたくない自分が自身の奥に居座る。『TURN NOTE TURNをめぐる言葉2020』から。

2021・7・13

Aさん

外見から他者を判断するということが自体は悪くはないかもしれない、という□の文章の内容には共感しました。小学生の時、男子は黒色系のランドセル、女子は明るい色のランドセルが当然だという決めつけに疑問を感じたこともあり、そのため、「ア（二字）」観念と聞いたなら、それだけで悪いものかと思ひましたが、□では、逆に「ア」観念を利用した自己「イ（二字）」のことが書かれています。自分がどのような人間であるかを「ア」観念によって意図通りにとらえてもらえるように装い、振る舞うということです。それを体現したのが□の文章の「X」という登場人物なのだと感じました。